

# 弾き歌い授業における学習意欲向上のための試み

## An Attempt for Improving Motivation for Learning in Class of Singing with Piano

Keyword: 時間外学習・自己評価・記録・自己マネジメント・意欲向上

Keyword:

Study after Class, Self-Assessment, Keeping Record,

Self-management, Improving Motivation

児童学科非常勤講師 草薙 裕子

### はじめに

毎年、受け持ちクラスの学生から、入学前の音楽経験のアンケートを取り授業を進めている。詳細なデータ分析ではないが、高校の音楽授業を選択していない学生は、3割から6割。サークルでの音楽活動を含めても高校時代の音楽的活動は極めて乏しい状態と考えている。ピアノの経験が全く無い、またあったとしても記憶の彼方、苦手と思う学生も多く、基礎的音楽知識の不足は容易に想像できる状態である。

このような状況を前提とし、授業では幼児教育の現場で必要とされる「弾き歌い」弾くこと+歌うことの基礎技能の習得を目指して行われている。幼児の音楽表現活動を実践する現場においては、こうしたピアノ、歌、と独立した二つの演奏領域を一人で行うという難易度の高い領域の技術が必要とされている。

これまで、ピアノの演奏技術習得を中心に教材が選ばれ、授業がすすめられてきたが、2009年度より、弾き歌いの問題点を改善すべく、歌うことに重点をおく授業への転換とともに教材が新たに編纂されてきた。新教材では、新たなコード伴奏法が提案され、ピアノを弾く、伴奏を弾くことにとらわれず歌に集中して表現することを目標にした授業が行われている。

「歌を中心とした弾き歌いでは、まず歌詞を朗読し、その歌詞から何を伝えたいかの思い描くようにし、言葉の持つリズムや抑揚を感じる事が大切<sup>1)</sup>」「伴奏することよりも歌うことに意識を向け、歌うことを妨げるほどの負担をかけない伴奏<sup>2)</sup>」との考え方を重視するものである。また、初心者が簡単に学習できる方法として、へ音記号の譜表の読譜からの解放がメリットとして考えられている。

このようにして、ピアノで子供の歌をリードするのではなく、子供の歌う表現を引き出すような保育者の表現力を養うべく授業が展開されてきた。

しかしながら、コード伴奏ではまず英語音名を覚え、その英語音名で表記されるコードのベース音（根音）を左手で弾く方法が単音伴奏として初めに習得され、伴奏部分の記譜が無いために初心者に限らず「最も簡単な弾き方に留まったり、工夫もせず練習もそこそこ」で授業に取り組む学生がいるという現状がある。クラス変えなど様々な工夫がなされているが、こうした問題に授業方法の観点から改善できることはないかと考え研究に至った。

### 1. 研究の目的

2011年度から新メソッドを取り入れて開講されているのは、前期「音楽Ⅰ」15回、後期「幼児音楽A」15回である。このうち、筆者が対象としたのは、前期開講「音楽Ⅰ」15回である。受講するのはほとんど

ど新入生であり、不安と意欲が混在した状況で授業が開始される「本来、大学生は主体的に学ぶべき」存在として指導者はとらえることが多いが、主体的、能動的な学習姿勢を期待するのは難しいのが現状である。極めて限られた時間で、弾き歌いの基礎的技術の習得を目指すためには、まず目標を明確にした上で、学習意欲を最大限に高めることが必要と考えた。この点について笠井も次のように述べている「保育者養成のように限られた時間、環境、設備、カリキュラムの中で保育現場が求めている内容に適応するためには、教材がより保育内容に近い要素を含み、合理的で明確な習熟目標があるほうが効果的であると考え<sup>3)</sup>」

そこで今回は、a. 明確な目標を持つ（各自の生活状況に基づき練習時間を計画する）、b. 実行（この授業においては授業時間外の練習）、c. できたか否かの自己評価をする、d. 授業外学習の改善的取り組み（この授業においては次週の課題・宿題）に向かう、という受講者自らによるPDCAサイクル（計画・実行・評価・改善）を取り入れた意欲向上を試みた。

## 2. 研究の方法と仮説

本研究では授業のアンケート調査により実態を探ることから始め、記録をとることにより主体的で実効性のある自己マネジメントの向上をめざした。

- I. 学習の目的を知る（授業目標とともに、各自の具体的目標を提示）
- II. 目的達成の方法を知る（あらかじめ各自の1週間の練習時間計画表を提出させ実行）
- III. 達成の実感を得る（練習時間の実行と成果を得る）

上記3点が学習意欲に影響があるとの考え方を軸に毎時間、自己判断による記録を行った。

記録内容は

- ①授業の中で発見したこと（授業の中での気づきをうながす）
- ②日々の練習状況（事前に作成した毎日の練習計画表に基づき自己評価）…計画&実行
- ③弾くことと歌うことのどちらが難しい？（弾くこと+歌うことが弾き歌いにおける基礎的スキルととらえ、あえて困難を感じる演奏領域を意識させた）
- ④向上したと思えること（練習の成果、達成感があったかどうか）…評価
- ⑤宿題の練習意欲（次週の課題に取り組む意欲はどうか）…改善

②、④、⑤は記述とともに5段階で各自が評価記録を行った。評価にあたっては基準項目の提示にとどめ、できるだけ自己判断による記録をつけることで自己マネジメント力を高め、具体的個別の目的を認識して学習実感や達成感を得ることが、学習意欲向上につながるのではないかと考えた。①、③は記述のみとした。

### 5段階の評価基準

②に関して、

- 5 - 計画より多くできて、達成感がある
- 4 - ほぼ予定通りできて、ある程度の達成感がある
- 3 - 予定の半分くらいしか練習できず、達成感が不足
- 2 - 練習時間に他の予定を入れてしまい少ししかできなかった
- 1 - ほとんど時間がとれず、直前の練習だけになった

④に関して、

- 5 - 思った以上に向上した部分があり、達成感と更なる意欲を持った
- 4 - 向上したと感じる部分があり、ある程度の達成感を持った

3 - 向上したと感じる部分はあるが、達成感を持つには至らない

2 - 少し向上した部分があった

1 - 向上したと感じる部分なかった

⑤に関して、

5 - 課題以上をできるよう練習したい

4 - 課題を自信をもってできるまで練習したい

3 - 自分の課題を理解し、計画通り練習したい

2 - 自分の課題を理解しているが練習時間が無い

1 - 自分の課題が不明確

期間は前期15回の内、オリエンテーション、初回授業、テストを除き、安定的に授業に取り組めると思われる10回について2クラスで行った。

なお③については「歌に集中できるように」と提案された本学テキストの意義が指導において反映されたかどうかについて考察を加えたいと考える。

### 3. 事前の調査

クラスの編成はオリエンテーションの時に行われたアンケートにより「初級者、準初級者」とされたグループで、それぞれ8人である。

Aクラス

私語が多く授業に集中できない学生が複数いて、全体として授業進度が遅れ気味。

全員ピアノ学習の経験があるが、1年未満が3名である。

ピアノが好きと答えたのが5名に対し歌が好きと答えた学生は2名。歌が苦手、もしくは音痴だから、高音が出ないから、声が小さいから嫌いだと答えた学生が6名いた。

Bクラス

全体として落ち着きがあり、授業に集中できる。

ピアノ学習の経験は全員3年以上で、さらに10年以上が4名である。

ピアノが好きと答えた学生は7名、歌が好きと答えた学生も7名であった。

### 4. 結果と考察

毎回の記録から特に②日々の練習状況④学習成果の実感⑤次週への課題取組みの意欲をグラフにした。

グラフでの表記においては内容を簡略化し、②実施、④成果、⑤意欲とする

グラフ1, 2参照

推測では、学習成果の実感や達成感が次週への学習意欲を引き出すと考えたが、むしろそれらが不十分、不足と感じた場合に次週への取り組み意欲をかきたてているのではないかという傾向を今回の調査では得た。

Aクラスの場合、④成果より⑤意欲が高くなった回数が9回。②実施より④成果が高くなった回数は3回。②実施より④成果が低くなった回数が7回。

Bクラスの場合、④成果より⑤意欲が高くなった回数が9回。②実施より④成果が高くなった回数は2回。②実施より④成果が低くなった回数が6回。

つまり、A、Bクラスともに練習の成果が低く感じられた場合、次週への取り組み意欲が高まっていると考えられる。成果を得ることにより意欲が高まることは予測できたことであるが、それ以上に、明確な目的意識がある場合高まるといえよう。特に発表会（中間テスト）をひかえると、練習意欲が高まる。また

テキストにこだわらない自由曲を宿題とした場合も同様の傾向が見られる。

さらに、調査終了後に追記アンケートを行った。

①の各自で練習計画作成することについて、②、④、⑤の自己評価をすることについての記述をもとめた。①については「自分のペースでできて良い」「自分の空き時間にできて良い」等肯定的意見がA、Bクラスともに5名ずつ。このことによる反省意見「自分で決めた練習計画を忘れた」「計画通りにできなかった」等が3名ずつであった。②、④、⑤の自己評価については「学んだことが分かって良い」「次の課題が明確になって良い」「自分のできていない事が分かる」「振り返ることができて、反省点や課題がみえた」「練習成果をあらためて認識できた」「5段階の評価で手軽にできた」等A、Bクラス合わせて14名が肯定的意見、2名が「5段階評価の内容を各自に配布してほしかった」という方法に関する意見であった。

また、「どうすればやる気になると思いますか?」という問いについては2クラス合わせて ・上手になるため(なろうとする)が4名 ・将来のため(現場に出た時のことを考える)が3名 ・他の人の演奏を聞くが2名 ・みんなで歌うが2名 ・楽しむ、好きな曲を弾く、先生のお手本演奏、ごほうび、特に無し等が1名ずつであった。

こうした結果から考えられるのは、i. 明確な習熟目標や具体的改善目標を得た時、練習意欲は高まる、ii. 自己評価することで自発的学習につながる、iii. テストなど外的具体的な目的がある場合意欲は高まる、iv. 自由曲など、自主的課題を得た時意欲は高まる、v. 適切な記録が学習意欲を高める効果をもつことにつながる、というものである。

つまり、学生は潜在的に向上心を有しており、適切に引き出すことが重要である。それを行うのは指導者の役割であり、それは個々の状況を判断し適切に行うべきであると考えられる。

#### <具体例>

課題の練習方法をテキストにも細かく記載してあるが、授業の個別指導の際に、アドバイスを加えたり、直したりする事柄のうち「メロディーに対して、どのような伴奏形にするか」については例を弾いたり口頭で指導するだけでは忘れてしまい、音符だけでなく文字で(時間的制約や初心者にはかえって混乱が生じるため)記録させることになる。このような方法を加えながら、目標課題を具体化させる必要がある。

右手のメロディーとコードのみの記譜による現在使用されている教材について今回のアンケートで、比較的音楽学習経験の多い学生は「使いやすい」「コードを学ぶのに役立つ」「左手の弾き方の参考例があってわかりやすい」という意見がある一方で、音楽学習経験の少ない学生は「知らない曲のほうが多かった」「アレンジの仕方をもっと教えて欲しい」「コードを覚えるのが大変なので伴奏も音符で書いてほしい」という意見があった。

さらに「伴奏パターンの発展的応用、アレンジ」については感性や音楽経験に依るところも多く、初心者、初級者には音楽的基礎力の底上げが同時に必要と考える。実際のところ、学生同士で教えあって練習している現状も見受けられ、こうした自発的学習も重要な向上意欲として認められるが、そのことにすべて委ねるべきではないと考える。

#### ③についての所見

Aクラス グラフ3参照

初回	ピアノが難しい-4名	歌が難しい-3名	両方難しい-1名
10回目	ピアノが難しい-3名	歌が難しい-5名	

## Bクラス グラフ4参照

初回 ピアノが難しい－4名 歌が難しい－3名 両方難しい－1名  
 10回目 ピアノが難しい－4名 歌が難しい－4名

両クラスとも全体として、「弾き歌い」という演奏形態を学んだことにより「歌うことが難しいと感じるようになった」という変化がおきた、ととらえることができる。

あるいは、「学んだことにより新たな課題を持つことになった」

つまり、「歌に意識を集中させることができた」のではないかと考える。

こうした変化が見られるように、指導者はこのような学生の変化や内的意欲を見極めつつ指導方法を考え、実践することが重要であろう。

## まとめと課題

技術習得が必要とされる学習内容を有する授業については、学生の経験や能力に応じた指導が欠かせず、指導能力も必要とされる。授業そのものが楽しいことも重要であるが、それは時に指導者の個性やパフォーマンスにまぎれ、必ずしも学生個々の技術習得や向上を目指すことにつながるとはいえない。

優しく、丁寧、楽しい授業のために様々な方法が考えだされているが、学生は初心者であれ保育者となるためには何を学び、どんな技術を習得すべきであるかという目的意識、向上心を持って授業に臨んでいる。

今回、音楽の学習経験レベルに違いのある2クラスにおけるアンケート調査の結果からも、意欲や向上心においては特別な差異は見られなかった。むしろ、限られた時間で学習効果を上げるためには、その方法、指導力を高める努力が我々指導者に求められているのではないかと考える。

現在用いられている学習記録用紙も、そうした指導に立つ側の利用法を加えることによって、単に学生の記録のためだけでなく、指導方法の向上にも役立てることができると考える。学生からは「自己評価の欄があるとよい」との意見もあった。

今回学習意欲の向上のため、学生自身のPDCAサイクルを促すべく記録による変化をみてきたが、計画される目標が本来のあるべき学習目標ではなく「練習時間」としたことにより、改善点も「練習時間」に向かうことになった。しかしながら、意欲向上のきっかけを探ることができたと考える。さらに客観的な変化を得るための研究方法を探る必要がある。

また、そもそも学習目的は教材に反映されるべきもので、目標をふまえた指導方法を考える上ではカリキュラム全体の学習目的からも考察を加える必要があると考える。

カリキュラム、教材、指導方法のそれぞれが方向性を等しく保つ中で、より良い学習指導が生まれ、学習効果を上げ、学習意欲の育つ環境が整うのではないだろうか。

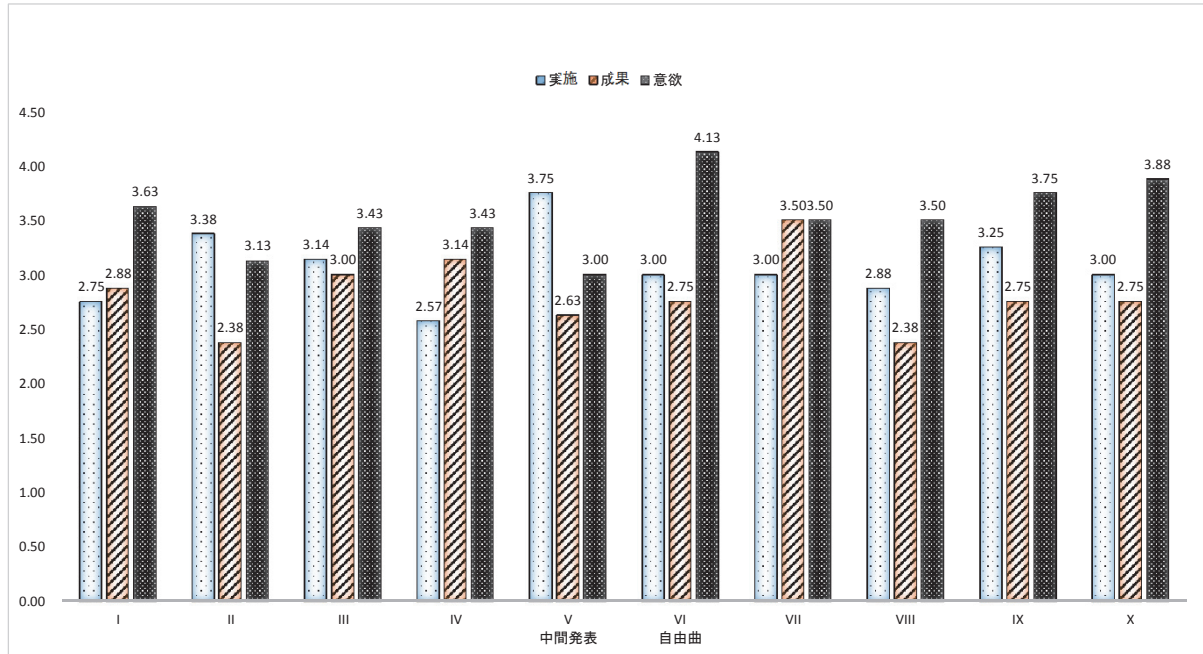
## 引用文献

- 1)、2) 西海聡子・笹井邦彦・細田淳子(2017)「保育者養成における弾き歌いのためのコード伴奏法」『東京家政大学研究紀要第57集、p.61, 62』
- 3) 笠井かほる(2008)「保育者養成におけるピアノ教材の検討ーリズム分析を通してー」『聖学院大学総合研究所紀要No.40、p.107』

グラフ1

(自己評価の平均値)

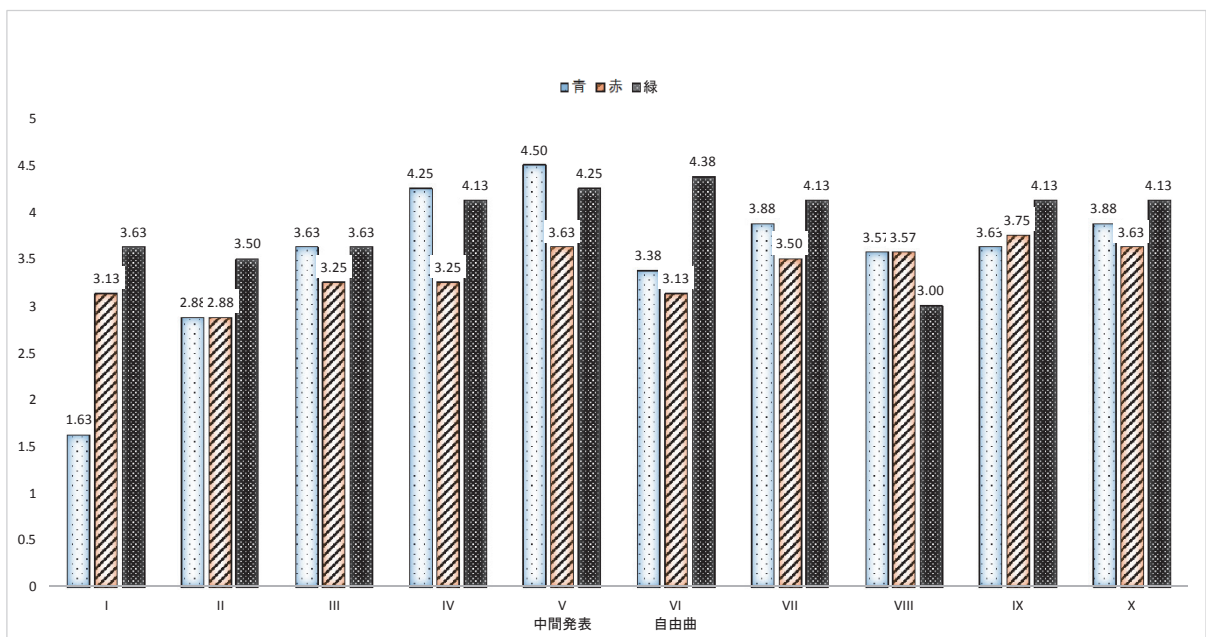
	I	II	III	IV	V 中間発表	VI 自由曲	VII	VIII	IX	X
実施	2.75	3.38	3.14	2.57	3.75	3.00	3.00	2.88	3.25	3.00
成果	2.88	2.38	3.00	3.14	2.63	2.75	3.50	2.38	2.75	2.75
意欲	3.63	3.13	3.43	3.43	3.00	4.13	3.50	3.50	3.75	3.88
出席者	8	8	7	7	8	8	8	8	8	8



グラフ2

(自己評価の平均値)

	I	II	III	IV	V 中間発表	VI 自由曲	VII	VIII	IX	X
実施	1.63	2.88	3.63	4.25	4.50	3.38	3.88	3.57	3.63	3.88
成果	3.13	2.88	3.25	3.25	3.63	3.13	3.50	3.57	3.75	3.63
意欲	3.63	3.50	3.63	4.13	4.25	4.38	4.13	3.00	4.13	4.13
出席者	8	8	8	8	8	8	8	7	8	8

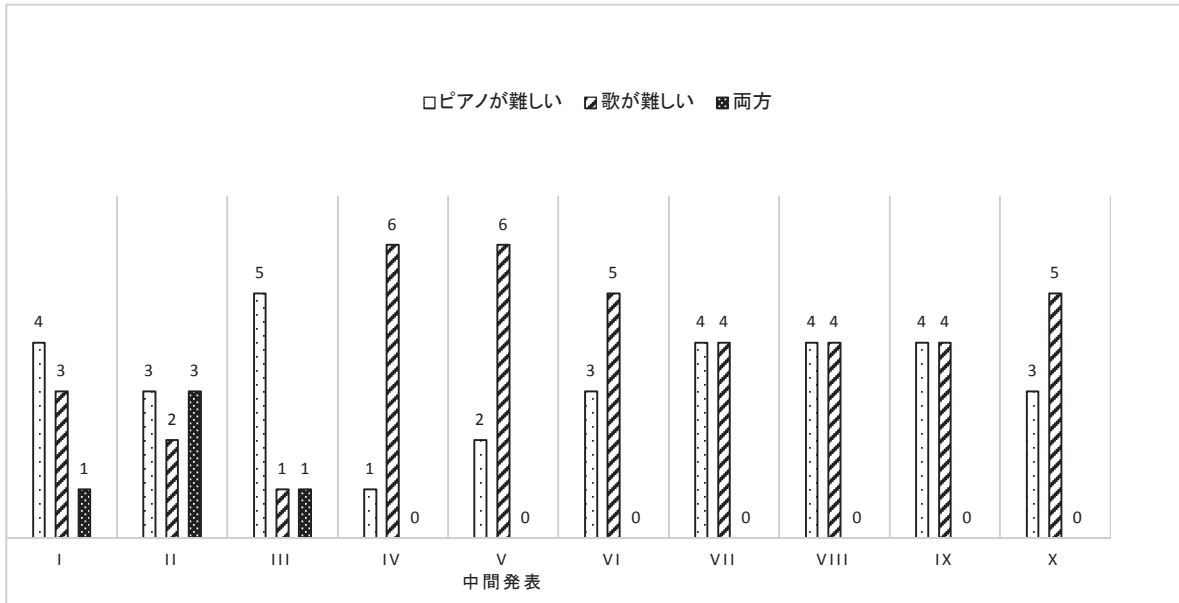


グラフ3

(単位: 人数)

	I	II	III	IV	V 中間発表	VI	VII	VIII	IX	X
ピアノが難しい	4	3	5	1	2	3	4	4	4	3
歌が難しい	3	2	1	6	6	5	4	4	4	5
両方	1	3	1	0	0	0	0	0	0	0

欠1      欠1



グラフ4

(単位: 人数)

	I	II	III	IV	V 中間発表	VI	VII	VIII	IX	X
ピアノが難しい	4	5	4	3	4	3	1	2	1	4
歌が難しい	3	3	2	5	3	4	5	4	4	4
両方	1	0	2	0	1	1	2	1	3	0

欠1

